

<b>Title</b>	松本周教授(助教)の「一九一〇年代の韓日教会とリベラル・デモクラシー：現代が学ぶべきこと」に対する論評(第二回日韓キリスト教関係(交流)史研究国際シンポジウム)
<b>Author(s)</b>	朴, ヨンコォン
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.53, 2012.3 : 139-143
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=4248">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=4248</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 松本周教授（助教）の

### 「一九一〇年代の韓日教会とリベラル・デモクラシー

#### ——現代が学ぶべきこと」に対する論評

朴・ヨンクオン

## I. 論文要約

松本先生の立派な論文を論評することは、浅学な私にとって光栄なことであると思う。

まず、私なりに松本先生の論文を要約すれば、次のようである。松本先生は、冒頭で韓国と日本の憲法の一部を提示し、二つの国の憲法が Liberal Democracy の理念を共有していることを前提としている。松本論文の言う Liberal Democracy は、一七世紀の英国で起こったピューリタン革命（一六四八年のピューリタンを中心とした革命。チャールズ一世を処刑して共和政を立てた）に起源を持った、英国またはアメリカの民主主義を指すものであろう。松本論文は、この Liberal Democracy の視点で一九一〇年の韓日教会、とりわけ日本の教会を分析した。

松本論文は、二章「三・一独立運動への過程——〈民族自決〉と韓国教会」において「一〇五人事件」と三・一独立運動を中心として韓日教会が Liberal Democracy にどれ程忠実であったかどうかを論じている。まず、日本で「一〇五

人事件」を耳にした日本教会の指導者、植村正久の意見を紹介し、植村がLiberal Democracyの理念に忠実に、「一〇五人事件」の原因となった日本を批判したと評価している。

また三・一独立運動について紹介し、それがLiberal Democracyに忠実な運動だったと認めている。植村は、ウィルソンの提唱した「民族自決主義」が三・一独立運動の外的要因だったと述べている。そしてウィルソンはLiberal Democracyに忠実な人であり、彼の提唱した「民族自決主義」という理念もLiberal Democracyに基づいていると主張する。三・一独立運動宣言文もその影響を受け、Liberal Democracyをよく表現していると評価する。反面、三・一独立運動を武力で鎮圧した日本の動きはLiberal Democracyに反する行為だったと述べている。

松本先生は、三章「日本の教会での三・一運動の受け止めとデモクラシー理解」では、一九一九年に出版された『キリスト教年鑑』の序文を取り上げ、当時の日本教会はLiberal Democracyの理念を正しく理解していなかったと批判する。組合教会の牧師・小崎弘道が執筆した『キリスト教年鑑』の序文について、松本論文は三つの問題点を指摘している。

まず、序文は、三・一独立運動を否定的に評価した。三・一独立運動が民族自決主義の「予期しなかった悪影響」によつて勃発した事件であると評価したのである。

次に、その序文は、Liberal Democracyに対する間違つた見解を呈した。小崎はLiberal Democracyを「民本主義」として理解したが、吉野作造が日本に定着させた「民本主義」という理念は、専制君主の治下においても実現されるのである。松本論文は三・一独立運動当時の日本の「大正デモクラシー」時代を、柏木義円の言葉を借りて「似而非デモクラシー」と規定している。

第三に、その序文は、世界改造よりも教会の改造が優先であると主張した。それは教会が世界問題に関心を持たないようにするための謀略である。そのようにするなら宗教を通じたLiberal Democracyの実現の可能性は消えてしまうで

あろう。松本論文は、一九一〇年代日本教会が Liberal Democracy の理念を正しく実現せず、当時の体制に順応してしまつた、と結論づけている。

最後に松本先生は、解放以降に Liberal Democracy が韓日両国の憲法の根本理念になつたが、これは「憲法の力であり、教会の力ではなかつた」とし、Liberal Democracy を生み出した共同体としての教会は、この社会倫理的命題を保持しなければならぬと主張している。

## II. 論文の貢献

まず、この論文が長く引用した『キリスト教年鑑』の一九一九年版の序文は、当時日本教会の立場を知ることが出来る貴重な資料である。このような資料を発掘して提示されたことを高く評価したいと思う。

この論文は、「Liberal Democracy」という社会倫理的命題をもち、韓日教会が国家と民族を超えた立場（民族感情から自由な状態）として共に研究できる基礎を提供していると思う。教会は元々国家あるいは民族に縛られた共同体ではなかつた。ローマ帝国の時代に最初形成された教会が当時宣布した「神の国」はローマ帝国に従属する共同体ではなかつた。それ故、ローマ帝国の迫害を逃れることができなかった。このように教会は最初より、ある特定の国に縛られない世界的かつ普遍的な共同体であつた。という意味で教会が、特定の国家あるいは民族に縛られるのは、正しくないであろう。Liberal Democracy はこのような意味において、韓日教会が共にアプローチできる良い命題である。またこの命題が、韓日教会にとって、松本論文の結論で示されたように「偏狭で排他的でさえあるナショナリズム」から脱することのできる研究主題であると思う。

松本論文は、一九一〇年代の日本教会が Liberal Democracy に対して充実した対応をしていなかったと評価したが、同じ基準を当時の韓国教会にも適用し、韓国教会を評価してみることも意味がある。これは松本論文が韓国教会に与えた新しい課題である。個人的な考えとしては、当時の韓国教会と日本教会とは同じ評価を受けざるを得ないであろう。このような意味で Liberal Democracy という主題は、韓日教会を客観的に評価する基準になると思う。

### Ⅲ. 質問

まず、些細な質問であるが、松本先生が肯定的に評価した植村正久牧師は、強制的に締結された韓国併合を賛美したことでもよく知られている。これは、Liberal Democracy に当てはまらないことではないか、松本先生のご意見をお聞きたい。

私の中心的な質問は、「Liberal Democracy」という主題そのものである。Liberal Democracy は、特定の時代、特定の地域における理念であると考ええる。ところが松本論文は、Liberal Democracy を、地域を問わずに普遍的に実現しなければならぬ理念だということを前提とする。また、その理念を教会（ピューリタンを含む英国教会）が生んだこととし、より価値があるものとして理解している。これは Liberal Democracy という理念を、過度に高く評価しているのではないか、と考える。Liberal Democracy という理念について客観的な評価が先行されるべきであると思う。松本先生より Liberal Democracy についてより詳細な説明をお聞きしたいと思う。

私の意見としては、Liberal Democracy という特定の理念よりは、「神の国」という、よりキリスト教的かつ神学的な命題がよろしいのではないかと思う。現代米国は「民主主義の拡散」という美名の下に世界各地において戦争を行っ

ている。一七世紀、英国におけるピューリタン革命として誕生した Liberal Democracy を全世界に普遍的に適用しなければならぬと主張しているように思われる。かつて、特定の理念、特に欧米で発生した理念を過度に高く評価することにより、西欧世界が東洋世界を支配する悲劇が存在したし、それは今も続いている。そのような意味で「Liberal Democracy」という命題より「神の国」がよりよい命題ではないかと思うが、ご意見をお聞きたい。

最後に、素晴らしい論文を発表し、深き学習と省察を許してくださった松本先生にもう一度感謝する。